

006

あかくと日は難面も秋の風

ばせを

句意は「秋になったが日は素知らぬ顔であ
かかと射^さしている。しかしそうはいつでも
さすがに秋、吹く風にどこかもの寂しさが感
じられる」というのです。

二俣の名主で米山宗右衛門・俳号石竜が来
遊中の諏訪の俳人・三井園鉄齋に揮毫^{きごう}を依頼
し、碑にしました。米山邸、二俣高女（現・
天竜高校）、同町の郷土史家の大場邸などを
経て、昭和31年に現在地に移されました。



季語 秋の風（秋）
場所 天竜区二俣町鹿島
清竜中学校
建立 文化7（1810）年

松尾 芭蕉（1644 - 1694）伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。
蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西
市で詠んだ句はない。

010

秋惜しむ松に夕日や館山寺

濱人

過ぎゆく秋、恐らくはロープウエーで大
草山まで行き、山頂から浜名湖を一望した
のでしよう。漣^{さざなみ}の立つ湖面は、夕日を反射
して黄金色に輝き、赤松林の木漏れ日はも
う頬に冷たかったのでしょうか。温泉街の喧^{けん}
騒^{そう}からは遠く、館山寺からは晩鐘^{ばんしょう}が響いて
きます。夕暮れの侘^{わび}しさの中に身をおいて、
心ゆくまで「行く秋」の趣きに浸ったに違
いありません。



季語 秋（秋）
場所 西区呉松町
大草山
建立 昭和40年

原田 濱人（1884 - 1972）浜松の生まれ。本名・八郎。最初『ホトギス』
に投句、高浜虚子に師事。後に『ホトギス』を去り、昭和14年『みづうみ』
を創刊・主宰。

022

あきびよりさんぼしようか 秋日和散歩唱歌も忘れぬし

麻瓜人

碑の傍に立つ説明文をそのまま紹介します。「昔小学校のよく歌った散歩唱歌、今その歌詞も殆ど覚えていないが、秋空晴れてと口遊み始めると忽ち少年に帰って秋晴の野にある思いがしてくる」。これは自句自解でしょうか。反対面には「夕心夕桜にぞ誘はるこ」が刻されています。蛇笏賞を受賞した浜松を代表する俳人でしたが、残された碑はこれが唯一です。



季語 秋日和(秋)
場所 北区初生町
浜松工業高校
建立 昭和51年

相生垣 瓜人 (1898 - 1985) 兵庫県高砂の生まれ。本名・貫二。浜松工業高校美術教師。最初『ホトギス』に投句。のち『馬酔木』同人。昭和25年、百合山羽公と『海坂』を主宰。昭和51年第10回蛇笏賞受賞。

045

あまがわはまな はしじゅうもんじ 天の川浜名の橋の十文字

子規

「中天には天の川が鮮やかに見える。湖に架かる浜名の長橋と十文字をなすようだ」というのです。大きな構図です。

子規が新聞『日本』紙上で俳句革新運動を展開した時、いち早く呼応したのが静岡師範(現・静大教育学部)の学生だった加藤雪腸でした。雪腸は子規の直弟子です。碑は雪腸が主宰する曠野社が中心となり建立。碑面は子規の自筆の拡大です。



季語 天の川(秋)
場所 西区舞阪町弁天島
弁天神社
建立 大正14年

正岡 子規 (1867 - 1902) 四国松山の生まれ。本名・常規。別号・獺祭書屋主人、竹の里人。新聞『日本』、俳誌『ホトギス』で俳句革新運動を展開、近代俳句の基礎を築いた。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

050

あめつち やわ
 天地の和らぎを此若葉かな
 このわかば

ずいしよ
 随處



季語 若葉(夏)
 場所 東区豊西町
 十湖百句塚
 建立 平成22年

「二雨ごとに緑を増した木々が、今日一層鮮やかだ。辺りが若葉に覆われているよ」というのです。十湖百句塚完成に当たつての祝吟です。この地に根付く蕉風を継承し、ますます発展させようとする、主宰者・随處の思いがこめられています。

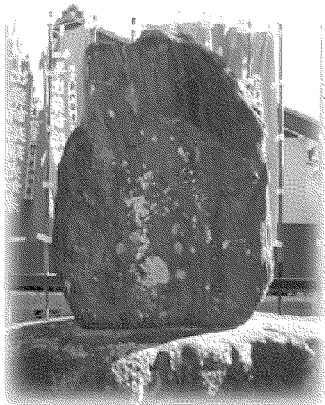
十湖百句塚は最初の福来寺から御殿山、法永寺を経て現在地に落ち着きました。この碑は移設を機に子孫の手で再建されました。

大木 随處 (1872 - 1941) 浜松市笠井新田町の人。本名・久市郎。別号・七十二峰庵(十湖より嗣号)。十湖門の四天王の一人。報徳家として、人生訓的俳風を特色とした。

051

あめつち げ
 天地や実に相生の松の声
 あいおい まつ こえ

はちじゅうにおうもくじゅん
 八十二翁木潤



季語 無季
 場所 中区早出町
 薬師堂
 建立 明治41年

相生の松とは、黒松と赤松が一つの根から生え出た松で、夫婦和合や長寿の象徴として、信仰の対象となってきました。この句は、長寿自賀の句です。俳諧の師である摩訶庵蒼山は明治2年に51歳で亡くなっています。この碑建立の年は師の没後40年。82歳の木潤としては、感慨ひとしおのものがあつたのでしょう。松は、薬師堂の西側に昭和46年ころまでありました。

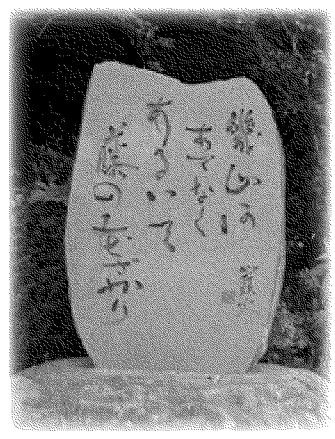
安間 木潤 (1827 - 1916) 浜松市安新町の人。本名・臺。別号・富月園。久米甘谷、小池古心と共に摩訶庵蒼山門の三傑と称された。楠円知が指導していた俳諧結社「砂連」の『磯千鳥』名誉会員。

069

幾山河あてなくあるいて藤の花ざかり

山頭火

「幾つもの山を越え、河を渡り、あてのない漂泊の旅を続けて来て、思いがけなく満開の見事な藤を見ることだ」というのです。日記によれば、満開にはまだ少し早かったのですが、西来院の藤棚の下は遠足で訪れた幼稚園児で賑やかでした。邪気のない明るい声と藤の花に癒された山頭火には、藤は盛りに見えたのです。「いくやまかわ」は、別訓もあろうかと思えます



季語 藤の花ざかり(春)
場所 中区広沢二丁目 西来院
建立 平成 15 年

種田 山頭火 (1882 - 1940) 山口県生まれ。本名・正一。別号・田螺公。『層雲』同人。自然を愛し旅と酒と句作に生きた。浜松来訪は二度。特に鴨江町在住の細谷野路が心のこもったもてなしをした。

077

一月の海まつさをに陸に着く

原田 喬

一月の海は真つ青になって岸边に寄せています。それを海が陸に接近してきたと詠んでいるのです。海が陸に着くという感覚が新鮮です。二月の海は空気がさえて澄み切っているの、青色が濃く見えて恐ろしさ、侵食するエネルギーすら感じます。この碑は原田喬が創刊・主宰した『椎』30周年を記念して、結社の人々によつて建てられました。



季語 一月(冬)
場所 西区舞阪町舞阪 舞阪図書館
建立 平成 17 年

原田 喬 (1913 - 1999) 『みづうみ』主宰の濱人の嗣子。父と俳句観を異にし、加藤楸邨に師事。昭和50年『椎』を創刊・主宰。

あ行 か行 さ行 た行 な行 は行 ま行 や行 ら行 わ行

095

入ふねや何国の沖の雪の苦

嵐牛
らんぎゅう

冬の荒れた日本海が思い浮かびます。船は北前船きたまえぶねでしょうか。「鉛なまのような重く垂れこめた空、遠い水平線の彼方かなたから、いま船が港に入ってきた。厳寒げんかんの日本海をどうやって越えてきたのだろう。命がけで運んできた積み荷には雪や氷がこびりついていてるよ」と、苦労を思わずにはいられないのです。凄みを感じさせます。先行する和歌などがあるのでしょうか。



季語 雪(冬)
場所 東区豊西町
豊西上公会堂
建立 明治12年

伊藤 嵐牛 (1798 - 1876) 掛川の人。本名・清左衛門。別号・柿園、白童子。岡崎の鶴田卓池門で幕末、明治初頭の県西部を代表する宗匠。松島十湖の師。

099

岩角に兜くだけて椿かな

蓼太
りょうた

「崖がけのあちこちに真つ赤な椿が落ちていてる。さながら兵どもの血しぶきが飛び散っているようだ」というのです。昼なお暗いこの深い崖に散る椿は、明るい光の下で見ると色とは異なり、一層血の匂いを感じさせ、リアルで不気味です。犀ヶ崖さいががけには、夕暮れには「カマイタチ」が出るとの伝えがありますが、そうした話を知る人は、今では少なくなりました。



季語 椿(春)
場所 中区鹿谷町
犀ヶ崖
建立 昭和12年ころ

大島 蓼太 (1718 - 1787) 蕉門十哲の一人・服部嵐雪の流れを汲む。別号・雪中庵三世。東西の吟行三十余回。駿府・遠江への雪門俳壇の拡張・定着に力があつた。

102

蘭を干してこの村にわがみよりあり

とみやすふうせい
富安風生

この村とは三ヶ日町野地。昔から琉球蘭草の生産が盛んでした。蘭草は寒い冬に水田に苗を植えて、暑い夏に刈り取る、厳しい作業と多くの手間を要します。この村には風生の姉、「もと」の嫁ぎ先・縣家がありました。都会に住む者にとって、農村のゆつたりとした時間の流れは心が安らぐところでした。姉家族と同様に、村全体に対する親しみを感じさせる句となっています。



季語 蘭(夏)
場所 北区三ヶ日町都筑
野地城跡
建立 昭和57年

富安 風生 (1885 - 1979) 愛知県の生まれ。本名・謙次。通信省に奉職。『若葉』を主宰。妻は天竜区阿多古の人。姉は北区三ヶ日町に嫁ぐ。

106

浮世には遠し花にも閑古鳥

かどう
蝸堂

龍禅寺の本堂と向かい合う築山に、堀川鼠来の碑と並んで建っています。句意は「浮世には遠い世捨人、俗世を逃れて生きる私ゆえに、人々が花見に浮かれる季節も、私にとつては関係ないのです」というのです。

蝸堂は松島十湖と同じ小築庵春湖の門でした。俳諧教導職という箔のついた小築庵を嗣号したことで、それを切望していた十湖との間に生じた確執は天下の知るところとなりました。



季語 花(春)
場所 中区龍禅寺町
龍禅寺
建立 大正15年

松永 蝸堂 (1838 - 1919) 駿河国(静岡県)の生まれ。本名・平七。別号・小築庵。明治17年東京に出て橘田春湖の門に入り、小築庵を嗣号。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

107

鶯に花はまかせてほととぎす

うぐいす はな

早春・鶯、陽春・花、初夏・ほととぎすと、季節の推移を詠みこんだ句。和歌では時に見られますが、さらなる短詩形では珍しいものです。「春の梅と桜を愛でるのは鶯にまかせよう。青葉と共に季節は移り、もうホトトギスが鳴き始めたよ」というのです。

92歳の長寿を全うした夷昔の四十九日の法要に間に合うよう建てられました。碑面は橋爪の俳友・山本起雲の揮毫です。



季語 ほととぎす (夏)
場所 東区大瀬町
清岩寺
建立 昭和4年

榎木 夷昔 (1838 - 1929) 東区大瀬町の人。本名・要一郎。別号・夷中。夷白の嗣子。

夷昔

109

鶯の次韻を得たり瀧の音

うぐいす じいん え たき おと

「名のみ春、今日鶯の初音を聞いた。と、思いがけなくも続いてもう一羽の音が。瀧の音ばかりが響くひんやりとしたこの深山にも、ようやく遅い春がやってきたよ」というのです。

不動寺の山号「瀑布山」にちなんで詠まれ、建てられた句です。幕末に芭蕉の句碑が建てられて以後、蕉門を称する人々の句碑が多く建つようになり、急な階段の両側は、さながら碑林の趣です。



季語 鶯 (春)
場所 浜北区平口
不動寺
建立 昭和28年

鈴木 黄鶴 (1891 - 1934) 東区積志町の人。本名・潮二。別号・淡水、楽天居。俳諧は十湖門。日本画家として石楠花を得意とした。

黄鶴

125

宇津山へ椿藪なす正太寺

ホトトギス同人 堤俳一佳

正太寺は宇津山城址を背に浜名湖を眼下に臨む風光明媚な寺です。以前はホトトギス同人で『裸子』を主宰する山梨県の堤俳一佳を指導者とする裸子新居支部、同湖西支部、千両句会、さつき会の人々が句会を開くことが度々だったといえます。これはそうした折の句です。戦国時代に岬に築かれた天然の要塞、生い茂る椿と落花に戦いの昔を思ったのかもしれませんが。



季語 椿(春)
場所 湖西市入出
正太寺
建立 平成元年

堤 俳一佳 (1904 - 1994) 山梨県の人。虚子に師事したホトトギス同人。俳誌『裸子』を創刊・主宰。

127

馬通る三方が原や時鳥

子規

「三方が原を馬が通って行く。広い台地のあちこちからホトトギスの声が聞こえてくる」というのです。明治28年10月、浜松に立ち寄った際の句と伝えられています。9月ころには渡去する鳥の音が、どうして聞けたのか、創作時期が違うのかもしれませんが。碑は子規の直弟子だった加藤雪腸が主宰する曠野社が企画し、全国から寄せられた基金で建立されました。



季語 時鳥(夏)
場所 中区下池川町
天林寺
建立 昭和6年

正岡 子規 (1867 - 1902) 四国松山の生まれ。本名・常規。別号・獺祭書屋主人、竹の里人。新聞『日本』、俳誌『ホトトギス』で俳句革新運動を展開、近代俳句の基礎を築いた。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

132

梅が香にのつと日の出る山路かな

芭蕉翁

「夜明けの山路は清冷の気に満ち、余寒が頬に冷たい。どこかから梅の香が漂ってきたとき、彼方の雲を分け、のつと朝日が射し出てきた」というのです。低い山はもう峠に近づいているのでしよう。参詣者が体験した早春の朝の感触と呼応するよう意図した選句でしようか。宮口には、庚申信仰が盛んだった往時を偲ばせる門前町の面影が残っています。



季語 梅が香(春)
場所 浜北区宮口
庚申寺
建立 明治17年

松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

152

細江帰帆 大空のなかより帰る白帆かな

故人 淡庵

ここでは「細江八景」として詠まれた八景各一句の冒頭、一景一句を紹介しました。八景とは、ある地域における八つの優れた風景を選ぶ風景評価の様式です。中国に始まり、日本でも絵画や韻文学のテーマとして一般化し、地名十八景(帰帆、秋月、晴嵐、暮雪、晚鐘、落雁、夕照、夜雨)と定まっています。引佐細江は古来、宮廷人が心ときめかした歌枕です。



季語 無季
場所 北区細江町気賀
細江神社
建立 明治30年

気賀 淡庵 (1810 - 1883) 北区細江町気賀の人。本名・林。通称・半十郎。気賀林として知られる。十湖の前任の引佐龐玉郡長。掘留運河の開鑿、百里園の開拓に功があった。

172

おも なみ よ うみ つき
面しろき浪のうき世や海の月

だいにちどうじんいどうこじ
大日道人以道居士



季語 月(秋)
場所 浜北区平口
不動寺
建立 昭和40年

「世は定めがないからこそ面白いのだ。ちようど海に浮かぶ月が波間にあつてさまざまに形を変えるように」というのです。これは同所に建てられていた師・松島十湖の「山の月こゝろも高う眺めけり」を意識し「海の月」と呼応しています。碑背には、以道居士の俳歴と句碑建立についての主張が刻されています。主張はそのまま十湖の主張でもありました。

宮下 以道 (1894 - 1974) 浜北区貴布祢の人。本名・喜一。別号・快日庵、不達庵、大日庵。十湖門の四天王の一人。俳禅指導社を設立、『松風』主宰。

あ行

か行

さ行

た行

な行

199

どり つえ な ふもとかな
かし鳥に杖を投げたる麓哉

きかく
其角



季語 かし鳥(秋)
場所 天竜区春野町領家
犬居城跡
建立 昭和55年

犬居城の麓に建つ榎本其角の碑。其角が晩年のころ、秋葉神社参詣の帰りにこのあたりを歩いて詠んだ句。「かし鳥」はカケスの別名でものまねが上手。突然のカケスの声色に驚き、その方角に向かつて思わず杖を投げ付けたというのです。火伏の神として昔から秋葉信仰・秋葉詣では盛んで、街道や灯笼の名に今も往時の面影を残しています。碑は郷土研究会による建立です。

榎本 其角 (1661 - 1707) 江戸の人。宝井氏とも。医師。蕉門十哲の一人。芭蕉の臨終に立ち会い「芭蕉翁終焉記」を著す。

は行

ま行

や行

ら行

わ行

209

鐘つきに登るも見えてあきの暮

ふせいあんあじん
不生庵阿人

ただでさえ寂しい秋の夕暮れです。お寺の鐘が響いてくると、侘しさはひとしおです。しかもその晩鐘も「登るも見えて」とまだついてはいないので。もし「侘し・寂し・身にしむ」などと直截的表現をしていたなら、句趣は台無しになっていたでしょう。詮とすべきは、読者の想像に任せればよいのです。阿人は古典・歌論にも通じていた人でした。



季語 あきの暮(秋)
場所 浜北区貴布祢
薬師堂
建立 明治41年

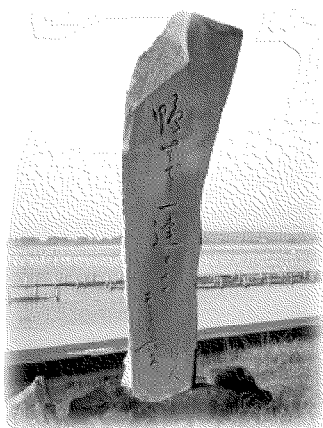
藤川 阿人 (1815 - 1878) 浜北区貴布祢の人。神官。別号・一如、不生庵。夏目甕磨について国学・和歌を学ぶ。俳諧結社・伏菟庵連の指導者。

217

鴨すでに一連とぶやその空

ひんじん
濱人

句意は「浜名湖にはもう鴨の先陣が飛来している。今、眼の前の空を、一連の鴨が飛んで行くよ」というのです。季節の訪れを鴨の飛来に感じとつています。西風が強く吹いているのでしよう。他に「二連二連現れ来る鴨や碧落ゆ」という句もあります。弁天島の魚籃観音と浮見堂の間に建つ、湖に面した碑は、濱人が主宰した『みづうみ』の同人によって建てられました。



季語 鴨(冬)
場所 西区舞阪町弁天島
乙女園
建立 昭和16年

原田 濱人 (1884 - 1972) 浜松の生まれ。本名・八郎。最初『ホトギス』に投句、高浜虚子に師事。後に『ホトギス』を去り、昭和14年『みづうみ』を創刊・主宰。